

教育についての雑感

新井桂子

この文章のタイトルの教育とは、私の子供達が幼稚園や小学校で受けている教育と私が地理学にかかわってきた年月を振り返っての教育と、二つの教育を意味しており、それらについて最近感じたこと、考えたことを述べてみたいと思う。

私には小学校3年生と、幼稚園の年長、年少になる三人の子供がいる。下の二人は同じ幼稚園に通っており、年少の方は、昨年春に新築された園舎の真新しい部屋で、15人というこの園では最も少ない人数で過ごしている。そこは幼稚園から連想される喧噪からは遠く、保育参観を見ている、子供達はじっくりと落ち着いて物事に取り組んでいる。これを見て感じるの、少人数教育のよさということである。

一方、年長の方は、決して狭くはないのだが、1クラス36人という人数が入るといささか狭く感じる教室で過ごしている。そして、驚くのが年間の行事の多さである。1学期は、5月の親子遠足、7月は音楽会に夏祭りに、年長ということで1泊のお泊まり保育のおまけがつく。2学期は10月の運動会に12月のクリスマス会という2大イベントがあり、この間に、園外保育と称されているミニ遠足に出かけたり、さつまいも掘りやどんぐり拾い、親子での益子焼の作品作り。3学期は、年長ならではの卒園式に向けての練習が始まり、合間には、なわとび大会、ドッチボール大会、小学校への見学に卒園遠足が行われる。これらの行事のうち運動会や発表会のためには、日々それへ向けての練習が行われ、子供の自由に遊ぶ時間は削られることになる。また、年長では、文字や数字のおけいこが行われており、36人の子供達がいっせいに机に向かって鉛筆を動かす姿も見られるのである。親としては、子供は大変密度の濃い一年を過ごしたと思う。これほどの行事をこなせる子供の力に驚きを感じるほどである。しかし一方で、急ぎすぎていないかという危惧も感じる。

一番上の小学校3年生になる子供が小学校に入

学してからは、自分の小学校生活と比べての違いの大きさに驚くことが多かった。といっても、30年も前の小学校と比べること自体に問題があるのかもしれないが。違いの第一は、小学校での、いわゆる勉強の時間が少ないことである。子供の通う小学校では、運動会や劇・歌などの発表会といった行事の準備、さつまいもを育てるといった体験学習的なもの、子供の小学校では「いのち」の学習と呼ばれている、新しい教育課程で「総合的な学習の時間」と規定されているものの準備段階の時間など、実に様々な教科以外の活動が行われている。今の小学校に、子供達が家庭や地域でできなくなった経験をさせるという要素が多く取り入れられた結果だろうか。これらの時間は、子供達の創造性を高めたり、家庭では経験しにくくなった自然への親しみ、親子の関係を考え直すきっかけなどを与えてくれる効果があると思う。一方で、国語や算数については、夏休み等に宿題が出されるわけでもなく、家庭の裁量に任される。今の学校は社会性を身につける場、勉強は学校以外の場所で行われているように思うのは考えすぎだろうか。

違いの第二は、言葉遣いである。先生に対して、敬語を使うことはおろか、「です、ます」を使って話す場面に出会うことは少ない。子供は先生を恐いとは思っているが、反面、少し距離のある友達くらいに感じているように思う。先生は決して偉くはないのである。家庭では、親も、子供にとっては少し距離の遠い友達になってしまい、こども子供に歯止めをかける存在がいなくなったといわれる。子供にとって偉いと思える存在は必要なのだろうか。偉いと思える存在は子供の目標となり、いつか大人になることを好ましいこととして想像させる存在になるとはいえないだろうか。また、先生は先生、友達友達というように、相手に応じて、場所に応じて適切な行動をとれることも大事なことでないだろうか。

自分が子供を持つようになって強く感じたことは、つながりということだった。それは、血のつながりでもあるし、人類という種が続いていくことでもあるし、過去から未来へ続いていく時間の流れでもある。私は子供達に、そうしてつながっていくことの大事さ、いとおしさ、暖かさを伝えていきたいし、それを感じながら大きくなって欲しいと思っている。

さて、翻って私はまだ博士論文を書くという道の半ばにある。この状態は、自分に親であると同時に子供でもあるような不思議な気持ちを抱かせる。結論が出ていないという点で学生の延長であるかのような状態が、そう感じさせるのかもしれない。

私が、当時はお茶の水女子大学文教育学部地理学科といわれていた現在の人文科学科地理学コースの前身に入学したのは、千年紀最後の年と騒がれた昨年から数えてちょうど20年前の1979年のことであった。それから早20年もの歳月が過ぎてしまったことに驚くのは、私ばかりだろうか。1979年に入学した私たちの代は、いわゆる共通一次世代の第一期生であった。同時に入学した学生の多くは1960年生まれであり、後に1960年生まれ以降は”新人類”と呼ばれるようになり、高度成長とともに育った私たちは世代の変わり目に、また、入試制度の変わり目にも当たることになった。

入学後、某教授からは、「あなたちの代は元気がいい」と言われ、前後の学年とは違うという印象を持たれたようなお話をうかがったが、私からみると、同級生一人一人自分をしっかり持った人たちの集団という印象になった。私たちの学年で、東京とその近郊の出身者と地方出身者とが半数ずつという構成だったと記憶しているが、前者の人たちの高校生活は後者の大学生活に当たると思えるほど、両者の大学入学までの生活には違いがあったように感じ、初めて、生まれ育った環境の違いということを実感した。

私が大学を受験した時には、願書を提出する際に志望学科を記入していたので、入学前の時点から自分で地理学科を選んでいくことになる。その時の志望理由は、中学・高校と社会科が好きだったことが大きかったと思う。「地理＝暗記科目」と言われ、敬遠される方も多いようだが、私は、どこにどういふ国があって、どのような作物がと

れるかなどを知ることが好きであった。休み時間に友達と地図帳を広げて様々な地名を言い合い探して遊んだりもした。しかし、お茶大の地理学科については、「蛭雪時代」に書かれていた知識しかなく、学問としての地理に深い理解もないまま、高校までの地理の延長のようなものを考えていたのだと思う。それは多分に地誌的なものであり、高校での系統地理的学習にも若干違和感を感じていたのに、大学では、地理学はさらに細分化されて私の前に現れ、最後まで地理学として統一した姿を見せてくれることはなかった。

思い返してみると、大学入試を目指した高校までの勉強は、地理に限らず、教科書を暗記し過去の実験問題を解いていけば、自ずと結果につながるようなものではなかったか。そこでは、問題を解く技術を身につけることが重要で、本質について特に考える必要はなかったのだと思う。ところが、大学とは、あるいは、学問とは考えることが重要なのだ。「地理学とは何か」ということに対しても、自ら答えを求めようとする努力が必要だったと思う。しかし、当時はそんなことを考えもせず、大学での学問のやり方を理解できないままに卒業してしまった。

昨年の春から、私は田宮先生が指導なさっている博士課程のゼミに出席させていただいている。現在博士課程に在籍している学生6名に助手の方が加わる構成で、博士課程在籍期間に出身を同じくする仲間を持たなかった私にとっては、地理学出身かつ博士課程の学生のみ対象のゼミは初めての経験だった。地理学科出身者から博士課程に進学する学生の数が増えた結果であり、発表を聞いて、時期を同じくして人文主義地理学を学んだ経験があり、同じ立場で議論ができる人たちの集まり、という印象を持った。

そして、ゼミに出席する中で、私は「何か違う」と思い続けていた。それは、私が修士課程に在籍していた1980年代の半ばとは、話題にされている地理学がすっかり変わってしまったということだった。1980年代半ばの修士課程の時期には、個性記述的な地理学を批判したSchaeferの論文や計量革命という言葉に初めて触れ、科学になろうとする地理学を知った一方で、Tuanの人文主義地理学の論文、経済学・哲学などの概念的・観念的な文献をゼミで読むという段階で、どれについても評価は定まっておらず混沌とした状況だった。

私の中では、それを消化して修士論文に取り入れるところまでは考えられず、「自然と人間の関係を考える」というレベルで修士論文を書くことで終わった。

学界の中では、1980年代末から90年代半ばにかけて、内藤正典（1989, 1990, 1994）によって伝統的な地誌に対する批判がなされ、現実の社会と接点を持ち、現代的な問題意識に基づいた地域研究が提唱され、小泉武栄（1992, 1995a, b）によって研究方法を確立して地理学を活性化させようという人文地理学者に対する提言が行われ、太田勇（1995a, b）によって、人文地理学の役割を広く世に知らしめるためにも、人間の生活実態を正確に伝え分析すること、現実世界の困難な問題に正面から取り組むことの重要性が述べられた。そして、昨春に出版されたアエラムック「地理学がわかる」でも、15年前に地理学科で教えられていた地理学とは全くイメージの異なった地理学が描かれた。

これらの論文等から、今地理学には、現実社会の問題と結びつき、その解決の一助となる社会的に貢献できる研究が求められていることがわかる。また、他分野の研究者と積極的に交流する必要も述べられている。いずれも自分には欠けていたものであり、私の当面の課題は、現実社会と結びついた問題解決型の研究という視点で自らの論文を書く作業を見直す一方で、地理学の中では当然のこととして使われてきた地域・地域性ということについて、他分野からのアプローチと比較しながら考察し、それらをいかに記述するべきかを考えることである。

参考文献

- 太田勇（1995a）地域の姿が見える研究を（1）地理、40（8）、67-73
 同上（1995b）地域の姿が見える研究を（2）地理、40（9）、85-91
 小泉武栄（1992）自然地理学者から人文地理学者へ 東京学芸大学紀要3部門、43、103-115
 同上（1995a）人文地理学者はいま何を期待されているか（1）地理、40（10）、66-74
 同上（1995b）人文地理学者はいま何を期待されているか（2）地理、40（11）、66-71
 内藤正典（1989）現代地理学の再検討——第三世界研究の視点から——（第一部）地域学研究、第2号、21-36
 同上（1990）地理学における地域研究の方向 地理、

35（4）、33-42

同上（1994）地誌の終焉 法政地理、22、32-43